角川文庫
— 699 —

めし

林　芙美子

角川書店

昭和二十八年十月十五日　初版發行
昭和四十五年二月二十日　三十五版發行

定價は、帶・カバーに明記してあります

角川文庫
角川しめ

著作者　林芙美子
發行者　角川源義
印刷者　中内佐光
東京都千代田區飯田橋一ノ二

發行所　東京都千代田區富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京一九五二〇八
株式會社　角川書店
電話東京(265)七二一(大代表)

落丁・亂丁本はお取替え致します

Printed in Japan　曉印刷・多摩文庫

林　芙美子

角川文庫

699

目次

めし　五
遊覽バス　二七
日常　五〇
雨風　七五
妻は何で生きるか　一〇五
ジャンジャン横丁　一三五
愛情の性質　一五六
立志傳　一七四
誘惑　二〇五
野鳥
解説　芝木好子　二一七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

遊覽バス

結婚は、していいものでもあるし、しないで、濟むものなら、しなくてもいいものだね、と初之輔がいつた。

その初之輔は、いつも、神色自若を、自慢にしているのだが、この、遊覽バスに乘ると同時に、空色の制服を着た、案内嬢のふきかけてくれる、會社の、宣傳香水には、一寸驚いた樣子である。

「S會社の宣傳によります、黄鶴香水でございます。旅はまず、よいにおいの慰めからと、申しまして、今日、御乘車いただきました、皆樣に、春らんまんの香りを、ふりかけさせて戴きます」

突然、一番前の席に、里子と腰をかけていた、初之輔の肩先きへ、ゴムマリのついた香水噴きで、案内嬢は、丁寧にえしやくをしながら、香水を、ふりかけてくれた。

初之輔は、あかくなつた。

一寸、照れた顔になり、ぐつと脚をのばした。すると、運轉手の、椅子の下に置いてあつた新しいふかしがまを、初之輔は、靴の先きで、がらがらと、蹴飛ばしてしまつた。

案内嬢は、あわてて、運轉臺へもどり、出口の方へ轉がつた、アルマイトのふかしがまの蓋をひろつて、「失禮いたしました」と、初之輔に詫びて、助手席のすみへ、それを置きなおした。

遊覽バスと、ふかしがまの、とりあわせは、里子には、おかしくてたまらない。

大阪というところは、なんて、面白いところなんだろう……。これが、里子の大阪初印象でもある。

「妙な匂いだね。石炭酸の匂いがしないかい？」

初之輔がいつた。

里子は、別に、妙な匂いとも思わなかつたが、冷藏庫を開けた時の、あの、つぶつぶの、にきびの噴き出した、ブリキ壁の、青臭い匂いのようにも思つた。

「この香水は、臺所の匂いがするのね」

「女に、臺所を想い出させる仕組みかな……」

「香水つて、甘い匂いのものがいいわね。どうして、遊覽バスで、香水なンかを、かけてくれるのかしら、服に汚點がつきやアしないかしら……」

「汚點位はがまんしなさい。香水をかけてくれるのは、旅の親切なんだよ。お互いに、せいせいした、香りをかいで參りましようというンだろう……」

人波が、朝の大阪驛を中心に、渦を卷いている。有料便所の、看板が、里子の眼についた。

里子は、右側の窓に、もたれて、四圍をながめている。有料便所のハイカラな建物の壁に、黄色い看板が立てかけてあつた。

——いつも、ピチピチ！

精力劑の、藥の廣告だ。

里子は、くすつと笑つた。
いつも、ピチピチ……。たしかにうまい廣告である。
「初之輔さん、ほら、あの看板見てよ」
バスは、まだ、エンジンの工合をたしかめている樣子だ。
初之輔は、ぼんやり、椅子の背に頭をもたれさせて、考えごとをしていた。それは、つまらない考え事のようでもあり、わが、人生に、もつとも、重要な問題だと、思うような、ある事でもあつた。
「ねえ、大阪の街つて、ベタベタの廣告なのね」
突然、ぶるぶるんと、激しくエンジンがかかつた。中年の運轉手が、さつと、光つた靴で、乘り込んで來た。
いい天氣である。風もない。
バスは動き出した。朝で、月曜日のせいか、客は、二十人ばかりしか、乘つていない。
この大型バスに、二十人ばかりの乘客では、少々氣の毒だなと、初之輔は、バス會社の經營にまで、心配をしている。
案内嬢が喋り出した。
言葉は、東京語だが、訛りは大阪音で、
「わたくしたちの、大阪市は、大阪灣をふところにいだきまして、六甲、生駒なぞの、山脈(やまなみ)をめぐらした、攝河泉の、大平原の、ほぼ中心にございます……」

コンパクト程の、マイクロホンを、口もとにあてて、説明をしている。
甘い聲であつた。
石炭酸と、香料の混じつた、その、妙な匂いが、暫く、車内にこもつていた。
どこで咲いた、櫻であろうか、金色の葉の繁つた、山櫻の枝が、バックミラーの下の、ガラスの花筒に、差してある。
大阪驛前の、朝の出勤時は、一寸刻みに、雜沓が犇きながら、流れている。
地下鐵、國電、私鐵、市電、バス、扇の要のように、この大阪驛へ、群集は、押し寄せては、また、四方へ流れ出てもいる。
阪急百貨店の、灰色の建物も、阪神ビルも、ネオンサインの看板の出た、曾根崎警察署も、まだ、しつとりと、露をおびたように、どの建物もぬれて見える。
交通巡査の、白い手袋の上げおろしだけが、半晴半曇の、朝の路上で、鮮かであつた。
「大阪城から、南へ、上本町、阿倍野という方面にかけましては、なだらかな丘になつております。大昔は、この邊りだけが、陸地で、今の船場、島の内、千日前、などの一帶から、西の方は、海でございまして、八十島かけてェ、こぎ出でぬゥ……」
里子は、案内嬢の歌聲をきいて、ちらつと、その方へ眼をやつた。自分と、いくつも違わない、案内嬢の、眞面目な表情に、里子は、眼をそらした。
昨夜、洗つた髪を、里子は、むぞうさに、赤いジョーゼットの、ネッカチーフで、一束に、襟もとにたばねていた。

遊覽バスは、やつと、群集の帶をつつきつて、左へ、ゆるく曲り、南の御堂筋へ、走り出した。

「この廣い通りは、難波驛まで、ほぼ一直線で四キロ、――一里ほどございまして、難波驛から、國道十六號線に續いて、和歌山の方へ參ります。この下を、地下鐵電車が、走つているのでございます」

里子は、走り去つて行く、大阪の街を眺め、いまごろは、東京で、みんな心配をしているのではないかと思つた。昨日、初之輔が、東京へ、電報を打つてくれたので、里子のいどころが判つて、吻としているには、違いないけれども、生れて始めて、こんな事を、しでかしたので、父も母も、がつかりしているのではないかと思う。

「電報は、ついたでしようね」

突然、里子が初之輔に念を押した。

「ついているさ、大丈夫だよ。馬鹿に、心細い、家出だね……」

初之輔は、眼を細めて、窓外を見たが、バスは、お初天神を左に走つていた。里子は、何か思い出したとみえて、うつむいて、ハンカチで、鼻をかんでいる。

人間というものは、いつも、いろいろな事を、考えるものだ。

國家に役立つような、りりしい事を、考える時もあるが、また、時には、つまらない、取るにたりない事も、考えるものである。

昨日も、三千代が、髪を洗つて、ぬれた髪を、ときつけながら、

「私も、大阪を隅々まで、見物した事がないから、里子さんが、いらつした次手に、その、遊

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

覽バスとかいうのに、御一緒さして貰います」

と、いうので、初之輔は、日曜日ではあつたが、わざわざ、三枚の遊覽バスの切符を、大阪驛の、ツウリスト・ビューローへ買いに行つた。

それが、今朝になつて、三千代の氣が、急に變つた。

初之輔は、ぼんやり、案内嬢の説明を聞きながら、留守番をしている、三千代の事を、考えていた。

どうして、うちの細君は、ネコの眼のように、うつり氣で、怒りつぽくなつてしまつたのか、どうにも、その心理が、判らない。

第一、いつまで、大阪住いさせられるのかと、このごろ、馬鹿に、東京を戀しがるようになり、里子の東京の話を、ふんふんと聞いていながら、あとは、暫く、返事もしないで、呆んやりしている。

あの、心理は、どうも判らない。

五年も、一緒にいるせいかな……。少々、世にいう、ケンタイ期とでもいうのかなと、初之輔は、三千代が、今朝がた、突然、

「私、行きませんから……」

と、云い出した原因を、考えていた。

すると、ふいに、また、柔い、大阪訛りで、

「この世の名殘り、夜も名殘り、死ににゆく身を、たとうれば、仇しが原の道の霜、一足ずつ

に消えてゆく、夢の夢こそ、哀れなれ」

と、流れるような、節まわしの聲が、聞えた。

初之輔は、眼が覺めたように、案内嬢を見た。右手を、肩のところへあげて、お初天神の、説明をしているところである。

ここは、一名、露天神ともいうのだが、いまは、食物屋横丁になり、朝で、まだ、戸を閉めてはいるが、夜ともなれば、さだめし、賑やかな通りであろう。

筆太な、めしと書いてある大提燈、うどん、すし、そんな看板が、ちらつと見えた。

案内嬢が、ぱつと眼を開けた。

可愛らしい顔である。ぽつてりした唇から、細い金歯が光つた。空色の、進駐軍型の帽子を、電髪の大きな頭に、ちよんと被り、同じ空色の制服で、靴は、白と茶色のコンビネーション。

「ここから、少々參りますと、その名も優しい蜆川や、蜆橋のあつたところでございます。近松門左衛門の、心中天の網島に、小春治兵衛の、涙川として、死の道行に、艶名をうたわれました、名高い所でございます。明治四十二年の大火、俗にいう天滿燒けの後、昔の蜆川も埋立てられまして、今は、その面影さえございませんが、あちらに、その名殘りを記念する、銅板が殘されております。少し、判りにくうはございますが、あの、銅板でございます」

車中の乘客は、いつせいに、案内嬢の指した方向をながめた。

このあたりには、全く、蜆川のおもかげすらもない。

二十二歳の里子は、ビルの一角に、眼をとめてはみたが、小春治兵衛が、何ものかも、しらな

かつた。

このごろの、若い娘というものは、大切にしてやればやるほど、底なしに、甘えては來るが、一寸でも、苦味いことをいうと、すつとそのまま、遠ざかつて、二度と、近よつては來ない。とても、利己主義で、薄情なものなのよと云うのが、三千代のいいぶんであつた。

だが、初之輔は、里子にだけは、そんな事は、あてはめて、考えたくはなかつた。

心の中では、苦味いことを、いつてやりたい時もあつたが、甘えられるものの、みえ坊さから、やつぱり、強い事をいつてしまいたくはなかつた。

「戰爭中に、ろくな教育も受けてはいないから、わがままな、娘や息子ができ上つたのですわ」

と、三千代がいつた。

初之輔は、若い女性に對して、そうした冷い氣持ちでは、立ちむかえなかつた。窓をむいている、里子のすもものような、柔い首筋や、初々しい唇のあたりの、皮膚の光りは、なんともいえない、天與のものといつたものがあり、情感をそそられた。

貧しい娘ではあるが、とにかく、自分で働いているのだ。大人が、文句をいう筋合いのものは、何もない。

高い山へ、ふうふういつて、登つてゆくようなものでない、平地を、手をつないで、のびのびと歩く、低山趣味の女性觀に、行きついている初之輔には、血はつながつてはいなかつたが、この姪の里子には、そうした、心安さを持つていた。ただ、できるだけの、慰めは、與えてやりたかつた。

堂ビルや、大江橋のダムや、綠色の粉をふいた、日本銀行のルネッサンス式圓屋根を、右に見て、大阪市廳、豐國神社、圖書館、裁判所と檢察廳の、赤レンガの建物の前を、遊覽バスは、ぐうん、ぐうんと走つて行く。

「大阪つて、私、好きになつたわ」

「そうかねえ、昨日來たばかりで、どこが好きか、判るのかい？」

「直感で判るのよ。氣取つてなくて、明るくて、いいところだわ」

「住んでいるうちには、退屈して來るよ」

「東京にいたつて退屈するでしよう……。私、半年ほど、大阪に住んでみたい」

「結婚の話は、どうなるンだい？」

「だから、それも、考えているの。東京と大阪位の距離で、その事も、考えてみる方が、いいンじやないかしら……」

ふくざつな表情で、里子が、初之輔の方へ、ちらつと、顏をむけた。

案内嬢はまた續けた。

「ここは、北濱二丁目、交叉點でございます。左の石造りの建物は、昭和十年につくられました、大阪證券取引所でございます。創立以來、七十年の古い歴史のある、世界屈指のもので、一と手千兩の市が立つと、大阪音頭にも、唄われております。このあたり一帶を、北濱の、株屋さんの街と申します」

初之輔は、自分の會社の前を通つたが、わざと、里子には默つていた。

大きな近代的なビルの間に、ところどころ、古風な、黑い塗り壁の家がある。

バスは、交通のはげしい通りを、南の堺筋の方へ向つて、走つて行く。

三越の角を曲り、高麗橋に出た。東横堀川の水の流れが、鉛色によどみ、道が悪くなつたのか、暫く、バスは大きくゆれた。里子は、自然なしぐさで、初之輔の腕につかまつている。

バスは停つた。

二十人ばかりの乘客は、ここから、案内嬢の先導で、大阪城見物である。

「大阪城は、今から、三百七十年ほど前に、太閤さんが、築かれましたもので、金城（錦城）または、南面山、不落の城とも、申します。ただいまから、露とおき、露と消えぬる、わが身かな、浪速のことは、夢のまた夢、の、辭世を殘して六十三歳を一期として、亡くなられました、英雄一代の、偉業のあとを、しのびたいと存じます……」

初之輔は、さつきから、バスの中で、うとうとしていたので、バスを降りて、城の天守へ上るのは、一寸おつくうであつたが、大阪へ來て二年、まだ、大阪城を見た事はない。

この荒れ果てた、城の變遷も、一度は、見ておくにこした事はないと、一行の後から、里子と肩を並べて、大手門で降りて、ぞろぞろ歩いて行つた。

巡査の乘つた、白いサイドカアが、さかんな音をたてて、正門の櫻門の中から走つて來る。

朽ち果てた門の兩側に、驚くばかりの巨石が並んでいた。說明によればその二つの石を、龍虎石というのだそうだ。

疊は、二十三疊敷けるのでございますと、いつている、案内嬢の言葉を、初之輔は、小耳に挾

んだが、何となく、風化した歴史を見ているようで、英雄だと説明されている、太閤さんの實感が、ピンと頭に來ない。

里子は、石などを見ているのではないらしく、きよろきよろした眼で、濠の中に飛び交う、小鳥を眺めていた。

地方から出て來た、中年の夫婦者とか、春の休みを利用して、大阪見物とでもいうのか、赤い揃いの服を着た、小學生の姉妹を連れた母親や、寫眞機を肩にして、男の子を抱いた、官吏風な夫婦者、商用で、大阪へ來た次手に見物して行こうというような、十人あまりの、金へん、糸へん的、活氣のある若い團體が、みな、神妙に、案内嬢の後から、のんびりと城内へ、はいつて行つた。

蛸石、振袖石を見て、一行は、警視廳の、西洋古城造りの、建物の前へ來た。

五層の白い天守閣が、埃つぽい廣場に、浮き立つてみえる。警察の音樂隊でもあるのか、どこかで、サキソフォンを鳴らしている。廣場の、ところどころに、白いペンキ塗りの、柵や、植込みが、この城とはかけはなれた裝置で、公園風をなしてゐた。

黒いエレヴェーターで、一行は、天守へ登つた。

里子は、いつも、初之輔の腕に、もたれている。五階で、エレヴェーターを降りて、狹い階段を八階へ登るまで、里子は、初之輔の腕を離さなかつた。

初之輔は、自分の前を登つてゆく、子供を抱いた男の後に、ぴつたりくつつきながら、子供の柔いむきだしの脚を、眼にとめていた。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com